再　会
mikatuki98

【碧】

わたしがわたしである為に心をスリットしても
それは見えはしない

闇に潜む月光草が音を立てて華を咲かせても
それは見えはしない

ぼくが作った２月メロディーを聴いてくれないかと
意気軒昂に羽を広げる過去世のわたし

だからね

だから見えないんだって！

海に行くつもりじゃなかったのに
わたしがわたしである為の海のど真ん中

春の気配という名のさよならが連れて来た

海のど真ん中

わたしがわたしである為にいつも戻る場所

だからね

だからみえなくていいんだよ

　倉家透明（くらけとうめい）は月明かりだけの薄暗い部屋で、詩人・百海（どうかい）リウの最後の詩集『碧（へき）』のラストページを読み終わると、パタンと、わざと大きな音を立てて本を閉じた。

『彼女……何で飛行機なんか乗ってしまったんだろう？　あの飛行機にさえ乗らなければ……』

　彼女、百海リウは倉家透明の婚約者だった。そして何よりも海を愛し、「わたしは海の上で最期を迎えたい」が彼女の口癖だった。

『なぁ、だからなのか？』

　彼女が初めて乗って飛行機は、海の上空でエンジントラブルを起こし、呆気なく墜落した。そう、海のど真ん中でだ。皮肉にも、自分の望みどおりに彼女は海の上で最期を迎えた。

　その後、倉家透明は５０年もの間、婚約者を想い、独りで生きて来た。春が来る度に、彼女の最後の詩集『碧』のラストページを読むことで寿命を全うしてきた。

『リウ……今夜は何だか見えるよ。君はあの頃の２２歳の姿のままなんだね。そして僕は……どんな風に見えている？……そうだね。だから見えなくていいんだね』

　倉家透明は、水槽の海月を少しの間眺めたあと、愛しげに「おやすみ」と言うと、ベッドに横たわった。彼が詩集『碧』を読んだ最後の夜だった。

了